

物」である。特に、ヒロインのレイチェルは、「黒」に身を包んだあの神秘的な「ジョコンダ」、つまり、紛れもなく「肉体」をもつアンダーワールドの系列の女性である。しかし、彼女は、Alison Lurie の *The Language of Clothes* から借用すれば、「宗教的或いは世俗の禁欲主義、官能的生活の象徴的拒否である」「黒」の衣服に、その「ピンク」の肉体を封じ込めようとしているのである。

研究発表要旨 『ドリアン・グレイ』の音と沈黙

今 村 潔

(千葉経済短期大学講師)

オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』は画家バジルのアトリエでの場面で始まるが、ここでは蜂の羽音によって、静けさが強調されている。この作品では、重要と思われる場面で、このようなかすかな音を利用して静けさを強調する方法が使われている。

例えば、最初にヘンリー卿の話聞いた後、ドリアンの内面に変化が現れ始めるところでも、バジルの筆の音と、彼が絵を見るために後ろにさがる音だけが聞こえ、静けさが強調されている。そしてヘンリー卿も、こういう時の沈黙の大切さをよく知っているので、意識的に黙っていると書かれている。

また、肖像画に最初の変化が認められる直前、ドリアンは静まり返った広場を眺めてから自分の家に入る。そしてその翌日、シビルの死の知らせを受ける前に、ドリアンの部屋には蠅が飛んでいることが描かれている。そして知らせを聞いた後では、夕闇の迫る部屋には、沈黙があるだけである。

画家バジルがパリに行く前に、ドリアンの家に立ち寄り、肖像画を見に行くが、二人は足音を忍ばせて階段を昇る。そしてバジルが殺されたとき、聞こえるのは、窒息したような叫び声と、床に血のしたたる音だけである。部屋から出て、階段を降りるとき、階段がきしみ、人の叫び声のような音を立てるが、ドリアンが立ち止まると何の音も聞こえなくなる。

そして、バジルの死体の処理をアラン・キャンベルに頼む場面でも、蠅の飛ぶ音と時計が時を刻む音だけが聞こえてくる。キャンベルはドリアンに関わりたくないのも、ドリアンの頼みを拒絶するが、ドリアンの脅迫によって承知せざるを得ない。沈黙はこの静かな重苦しい状況を効果的に描き出している。

ジェームズ・ヴェインが死ぬ場面は、兎狩の最中なので、にぎやかであり、今までの場

面とは違う。しかし、死んだのが水夫らしいと聞き、ドリアンが死体を確認しに行くとき、聞こえる音は、蠟燭のぶつぶつ燃える音だけである。

そして最後に、ドリアン自身が死ぬとき、彼は叫び声を一声あげる。しかし召使たちが様子を見に行き、部屋をノックするが、何の返事もなく、辺りは静まり返っている。このあたりの表現はパズルが殺された後とよく似ている。そして、この作品はこの場面で終わる。

しかし静かな場面ばかりではない。ジェームズ・ヴェインが死ぬときは静かではなかったし、劇場でも、観客やオーケストラの演奏など、確かに音はある。しかしこのオーケストラの演奏はひどいもので、とても音楽とは呼べるようなものではない。どちらかといえば雑音に近いものである。

騒音ではなく、音楽としての音は実際にはあまり出てこない。ドリアン・グレイが最初に登場する場面では、ドリアンはピアノに座っているが、ただ楽譜を見ているだけでピアノは弾いていないし、他にもオペラ座に行くという話が出てくるが、実際にオペラ座に着くと、音楽についての描写はなく、すぐに場面が変わる。

ドリアン・グレイがピアノを弾くという話は何度も出てくる。そしてパズルの死体の処理をするアラン・キャンベルもピアノやヴァイオリンを弾くということも語られているが、楽器を弾く場面はない。しかし、第十九章では、ドリアンが弾くピアノの音が聞こえてくる。この章の大部分で、ドリアンはピアノを弾き続け、ヘンリー卿もドリアンが弾く曲にコメントを付けたりもする。そしてドリアンは、次の日にヘンリー卿と会う約束をし、分かれるが、その夜のうちに肖像画にナイフを突き刺し死んでしまう。

ドリアンに精神に明かな変化が現れ、肖像画にも変化が現れていることを期待して、肖像画を見に行くわけであり、音楽が彼の心に与えたものは決して、取るに足りないものではない。ドリアンが最初に、ヘンリー卿の話の聞き、影響を受けたとき、その時の感動を音楽にたとえている。そして、そのドリアンに影響を与えているヘンリー卿の声が音楽的な声であることは何度か書かれている。

こういうことを考え合わせると、この作品では、構成上の重要な点で、沈黙や静けさが重要な働きをしていることが分かる。そしてそれを強調するために、全くの静寂ではなく、かすかな音が聞こえてくる。そして静けさだけではなく音楽が、作品の展開という点で果たしている役割はかなり大きいと言える。

